

宮崎県宮崎市（国内 24 例目）の高病原性鳥インフルエンザ発生農場に係る  
疫学調査チームの現地調査概要（令和 2 年 12 月 14 日実施）

令和 2 年 12 月 14 日に実施した現地調査により、以下のことを確認した。

1 農場の周辺環境

- ① 当該農場は、山間部にあり、周辺は山林に囲まれている。
- ② 農場から最も近い河川までは約 500m 離れており、農場側がかなり高い位置にある。農場周辺には複数のため池があり、約 1.0km の距離にあるため池ではコガモ 55 羽等 60 羽以上、約 5.7km の距離にあるダム湖ではオシドリ 97 羽やマガモ 30 羽等 100 羽以上の水鳥類が確認された。
- ③ 当該農場には開放鶏舎が 3 棟あり、高床式が 2 棟、低床式が 1 棟で、高床式には採卵鶏、低床式には大雛が飼養されていた。発生鶏舎は、農場の最も入口側にある採卵鶏舎であった。

2 通報までの経緯

- ① 管理人によると、発生鶏舎における 1 日あたりの死亡鶏は 10 羽未満で推移していたが、12 月 13 日に鶏舎の奥側に固まって 16 羽が死亡していたことから、管理獣医師を通じ家畜保健衛生所に通報したとのこと。

3 管理人及び従業員

- ① 当該農場では、通常の飼養管理を 4 名の従業員が行っており、毎日、鶏舎において鶏の健康観察を行うとともに、死亡鶏の回収を行っていた。4 名のうち 1 名は、大雛の管理を行っていた。管理人によると、この 4 名は、約 6.0 km の距離にある疫学関連農場でも同様に採卵鶏の管理を行っており、うち 1 名は毎日両農場を管理するのに対し、残りの 3 名はそれぞれ別の農場に入ることが多いが、特に担当は決まっていないとのこと。
- ② 管理人によると、鶏の管理をする従業員と別に、集卵作業を行う従業員が 4 名程度おり、作業のために鶏舎内に入るが、鶏に直接接触れることはないとのこと。また、他農場に入ることはないとのこと。
- ③ 鶏の管理をする従業員は、系列の育雛農場での入雛作業を手伝うことがあるが、最近の入雛は本年 11 月頃であった。
- ④ 当該農場への鶏の導入は、自農場の従業員が行っていたが、廃鶏の出荷作業は別の業者が行っていた。

4 農場の飼養衛生管理

- ① 管理人によると、従業員は農場外の事務所に置かれている農場専用の作業着、長靴、手袋を持参し、農場入口にて、それらを着用し入場していた。鶏舎毎に専用の長靴と踏み込み消毒槽を設置していたが、鶏舎毎の手袋の交換や手指の消毒は実施していなかったとのこと。
- ② 鶏舎横には飼料タンクが設置されているが、当該タンク上部には蓋が設置されており、タンク内への野鳥等の侵入やタンク内の飼料への野鳥の糞等の混入の可能性は低いと考えられた。
- ③ 管理人によると、飼養鶏への給与水は、地下水をくみあげ、当該農場専用の貯水タンクにて消毒した後、各鶏舎に供給されているとのこと。
- ④ 管理人によると、低床式の大雛舎の鶏糞は、農場内の堆肥舎で堆肥化していたが、高床式の採卵鶏舎の鶏糞は、鶏舎の床下に堆積されており、しばらく搬出作業を実施していなかったとのこと。
- ⑤ 死亡鶏については、関連農場の堆肥化処理装置で処理することになっていたが、装

置の調子が悪く、当該管理者は死亡鶏を堆肥舎の堆肥にすき込んでいた。

- ⑥ 管理人によると、発生鶏舎は、ケージの列ごとにオールアウトしており、オールアウトした後、ケージの洗浄・消毒を実施していたとのこと。
- ⑦ 管理人によると、車両が当該農場に出入りする際の車両消毒は、石灰帯により行っていたとのこと。
- ⑧ 管理人によると、農場敷地内に定期的に消石灰を散布し、消毒を実施していたとのこと。

## 5 野鳥・野生動物対策

- ① 発生鶏舎は高床式で、床下に鶏糞を堆積する構造であった。床上の側面には、金網とその外側にロールカーテンが設置されていたが、ロールカーテンの一部は破損しており、外壁には、小動物や野鳥の出入りが可能な隙間が認められた。また、床下部分の出入口には、防鳥ネットが設置されていたが、完全に覆われてはいなかった。さらに、外壁は金網になっており、下部の通気口にも金網が設置されていたが、いずれも破損箇所があり、特に通気口部分は野生動物が出入りしたことによると思われる変形が認められた。
- ② 調査時には鶏舎内でカラスが確認され、鶏舎内にはカラスによると思われる鶏卵の食害跡が多数認められた。また、農場外周にイノシシや食肉目の野生動物と思われる足跡が多数確認された。